実践報告

ベトナムでの海外体験学習を通じた参加学生の意識変化
― グローバル人材育成の観点からの一考察 ―

長縄　真吾・江原　宏

Perception Changes of the Students Participated to the Field Study Program in Vietnam: an Observation from the Viewpoint of Global Human Resources Development

NAGANAWA Shingo, EHARA Hiroshi

〈Abstract〉

Many Japanese universities are actively introducing overseas field study programs in response to the growing needs for the global human resource development in Japan. This paper reports the result of field study program conducted in Vietnam by the Center for International Education and Research, Mie University. The paper analyzed how the students' perception has been changed after participating in the program in terms of the personal qualities required to be a global human resources. The paper then examined what factors of the program significantly have affected those perception changes. The findings suggest that interactive activities with their counterparts of the same generations such as social exchanges and discussions with Vietnamese students and young Japanese workers in Vietnam are highly effective to inspire the Japanese students to become global minded, especially in a country of emerging economy such as Vietnam which has close economic and social relations with Japan.

キーワード：グローバル人材、海外体験学習、フィールドスタディー、ベトナム、開発教育

1．はじめに

世界経済のグローバル化の進展および我が国の少子高齢化と人口減少により、グローバル人材の育成は国家的課題として位置付けられ、大学においても、その取り組みの一環として短期の海外体験学習が活発化している。本稿では、2014 年 9 月に三重大学国際交流センターが実施した「ベトナムフィールドスタディー」の概要を報告するとともに、アンケート等を通じて観察された参加学生の意識変化を、グローバル人材に必要と考えられる各要素の観点から整理し、意識変化に影響を与えた要因を考察する。

2．三重大学における海外留学の概況

三重大学は学生数約 7,400 名、5 学部・6 研究科を擁する中規模総合大学である。基本目標として「三重の力を世界へ」を掲げ、国際交流の拡大と活性化を図るとともに国際的な課題の解決に貢献できる人材を養成することを、第 2 期中期目標における国際化に関する目標としている。

三重大学における日本人学生の海外留学実績は 2013 年度で計 227 名にのぼるが、そのうち協定校への半年以上の長期留学者数は 13 名にとどまり、残りの 214 名は半年未満の短期留学者である。2005 年 10 月に学内共同教育研究施設として設置された国際交流センターでは、国際インターンシップ、Tri-U 国際ジョイントセミナー＆シンポジウム、海外語学研修、アジア地域へのフィールドスタディー（以下、「FS」）等の短期海外学習プログラムを実施している。今回報告するベトナムフィールドスタディーはその一環として位置づけられる。

3．ベトナムフィールドスタディーの概要

3－1　背景

ベトナムフィールドスタディーは、三重大学では 2010 年より年に 1〜2 回実施され、2014 年度で 8 回目となる。過去 7 回の実施を通して、FS の内容は年々拡充・改善されており、学生自身の主体的な参加を特色として、三重大学の協定校であるホーチミン市師範大学との学生交流、JICA や NGO による国際協力プロジェクトの視察、現地日本人駐在員との交流等を行ってきた（既往の取り組みについては吉井 2011 参照）。2014 年度においては、これらのプログラム内容を基本的に踏襲しつつ、筆者（長縄）の出向元である JICA のネットワークや協力を得て、新たにベトナム北部の視察を含め国際協力プロジェクトの視察内容を追加した。実施期間は 2014 年 9 月 14 日から 26 日までの計 13 日間、参加者は学部生 1〜4 年生の 10 名である。

なお本 FS の実施に当たっては、日本学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度（短期派遣）により、7 名が一人 7 万円の奨学金を得ている。（残る 3 名のうち 2 名は三重大学の国際交流特別奨学金にて同額を受給、1 名は全額自己負担による参加）。

3－2　目的

本 FS の目的は、前年度までの目的を踏襲して以下のとおり設定した。

(1) 途上国の開発現場・国際協力のプロジェクト視察、ベトナム人学生との交流等を通じて、グローバルな視野と問題発見・解決能力を身につける

(2) 将来の国際ボランティア活動のきっかけを得る
(3) 途上国で行動する力を養う

3－3　募集・選考

2013 年度までは共通教育「ベトナム地域研究」の受講者の中から参加者を選考する方法をとっていたが、2014 年度は同科目が担当者の異動により開講されなかったため、全学生から参加者を公募する方式をとった。

当初 5 月末を締め切りとして学内説明会や学部掲示等の場を通じて募集を行ったが、申し込みは 3 名のみであった。そこで締め切りを 3 週間延長し、メールで全学部生および大学院生に周知するとともに、昨年度の本 FS 参加学生からも友人等に周知してもらった結果、14 名の応募がえられ、書類選考と面接の結果、最終的に 10 名を選定した。

参加学生 10 名の属性は表 1 のとおりである。三重大学の 5 学部のうち、3 学部の学生から応募があったが、医学部、教育学部からは今年度の応募者はいなかった。10 名中 3 名は海外渡航経験なし、5 名が先進国のみの渡航歴があり、途上国への渡航経験をもつ学生は 2 名のみ（ベトナム、タイ）であった。また、出身県は三重県が 4 名、他県が 6 名であり、三重大学生の出身県比率（三重・愛知各 4 割、他県 2 割）に照らすと、愛知県出身

表 1　参加学生 10 名の属性

所属学部	人文学部 5 名（人文学科 3 名、法律経済学科 2 名） 工学部 2 名　（物理工学科 1 名、分子素材工学科 1 名） 生物資源学部 3 名（資源循環学科、共生環境学科、生物圏生命科学学科各 1 名）
学年	4 年生 2 名、2 年生 4 名、1 年生 4 名
性別	男性 4 名、女性 6 名
英語力	10 名の TOEIC 平均点：585 点（最高 795 点、最低 415 点）
出身県	三重県 4 名 他県 6 名（愛知県、兵庫県、滋賀県、福井県、岐阜県、奈良県）
海外渡航歴	なし 3 名 あり 7 名 （渡航歴内訳） ①ベトナム・米国 ②フランス・タイ（旅行） ③米国（語学研修） ④グアム（旅行） ⑤フランス（旅行）、米国（ホームステイ） ⑥ドイツ ⑦豪州、米国、シンガポール、ニュージーランド（旅行）

者の応募が少なく他県からの参加者が多かった。また、参加学生のうち半数の 5 名が ESS サークルの所属であった。

3－4　事前勉強会

FS の準備として、計 7 回の事前勉強会を行った。出来る限り学生主体での準備を促すべく、学生各自の希望に基づいて担当テーマおよび訪問先の担当者を割り振り、各自が予め調べた内容を発表する形を取った。また訪問先毎に概要と質問事項を 1 枚紙にまとめた「サマリーシート」を担当者が作成し、全参加者間で事前に共有した。また現地での交流を円滑にするため、三重大学のベトナム人留学生を講師に招き、挨拶程度の簡単なベトナム語講座を 3 回にわたり実施した。各回の事前勉強会の内容は表 2 のとおり。

表 2　事前勉強会の内容

第 1 回（7/17）	：オリエンテーション・概要説明・勉強会の日程調整
第 2 回（7/24）	：訪問先別・ロジ面の担当者割り振り
第 3 回（7/28）	：ベトナム語講座①
第 4 回（8/18）	：各担当者によるテーマ・訪問先概要発表 ベトナム語講座②
第 5 回（8/25）	：ベトナム語講座③ 各担当者によるテーマ別発表会
第 6 回（9/1）	：サマリーシート内容確認、ロジ・安全対策面確認、 訪問先での出し物・交流活動等の検討
第 7 回（9/5）	：サマリーシート内容確認・出発準備

3－5　現地日程の準備

現地訪問先の選定にあたっては、各学生の関心事項をふまえつつ担当教員（長縄）が現地関係機関と候補となる訪問先を選定するとともに日程調整を行い、その後の訪問先との詳細の連絡調整はできる限り担当学生に委ねた。特に 2 日間の交流を行うホーチミン市師範大学との活動内容およびストリートチルドレンとの交流は、昨年度までの実施例をふまえて全面的に学生主体で企画・立案した。また、ホテルやレンタカー、通訳の手配についても、同様に担当教員の監督のもとで、原則として学生自身が行う方法をとった。

3－6　現地訪問先・活動内容の概要

今回の FS は、ホーチミン市を中心とする南部地域で 8 日、ハノイ市を中心とする北部地域で 4 日、移動日を含めて計 13 日間の日程で行った。訪問先の数は現地関係機関側か

らの提案もふまえ 20 を越え、1 日 4 件のアポイントをこなす日もあるなど、かなり過密な日程となった。現地での訪問・活動内容は、主に下記 4 つのカテゴリに分類できる。

(1) ベトナム人学生との交流および共同調査

ホーチミン市師範大学の日本語学科生と 2 日間の共同調査（フィールドリサーチ）を実施した。日本人学生は訪越前にあらかじめテーマを設定し、2 名ずつペアを組んで事前準備を行った。現地では 5 つのテーマ別に師範大生 3 名と三重大生 2 名の 5 名で日越合同チームを形成し、半日間ベトナム人にインタビューを実施し、翌日チーム毎に日本語での発表を行った。発表審査は、師範大ベトナム人教員、日本語教員、三重大引率教員（長縄）の 3 名で審査を行い、優秀チームを表彰した。

表 3　フィールドリサーチのテーマ

グループ	テ　ー　マ
1	ベトナムから見た日本・日本から見たベトナム
2	ベトナム人と日本人の家族の違いについて
3	ベトナムと日本の料理について
4	ベトナムと日本の衣服について
5	日本とベトナムの大学と大学生について

週末には、各学生が 1 名ずつ師範大生の自宅でホームステイを体験した。また、JICA プロジェクト視察として訪問したホーチミン工業大学、ベトナム国家農業大学（旧ハノイ農業大学）においてもベトナム人学生との英語でのディスカッションを実施した。さらに、現地 NGO であるストリートチルドレン友の会（FFSC）の訓練施設を訪問し、折り紙やボール遊び、縄跳びなどの遊びを通じたこどもとの交流も行った。

(2) 国際協力プロジェクトの視察

ベトナムは世界で 1，2 を争う日本からの大口 ODA 受取国であり、協力の分野や形態は多岐にわたる。訪問先プロジェクトの選定にあたっては、参加学生の関心や専攻分野をふまえて、ベトナムの経済成長に伴うプラスの側面（日系企業のベトナム進出支援のためのインフラ整備、人材育成等）と負の側面（環境汚染、交通渋滞・ストリートチルドレンの増加等の都市問題）の両面のバランスを取って選定した。また、有償資金協力（大規模インフラ開発）、技術協力（日本人専門家による指導）、ボランティア事業（青年海外協力隊およびシニアボランティア）等の援助形態面でのバランスを考慮した。

さらに協力の実施主体として、日本の自治体・大学が主体となる事業（ハロン湾環境保全)、ベトナムの現地 NGO による活動（ストリートチルドレン)、民間企業主体の事業等（職業訓練）も加えることで、日本の国際協力が JICA のみならず多様なアクターにより実施されている点が学生に理解されるように配慮した。今回訪問した国際協力関連の訪問先およびプロジェクトの概要は表 4 のとおりである。

表 4　国際協力プロジェクト視察先の概要

テーマ	訪問先・プロジェクト名	面談者・内容
ODA 全般	JICA 南部連絡所（ホーチミン）	対ベトナム ODA の概況
	JICA ベトナム事務所（ハノイ）	ハノイでの訪問プロジェクトの事前ブリーフィング
貧困	ストリートチルドレン友の会（FFSC）	活動ヒアリング、ビンチュウ能力訓練センター視察およびこどもとの交流
インフラ	ホーチミン都市鉄道建設事業	プロジェクトコンサルタントによる説明、プロジェクト現場の視察
	高速道路事業	現場視察（JICA 職員による説明）
産業人材育成	バリアブンタウ投資促進センター	日本企業の投資を促進するための現地政府側の取り組みヒアリング
	ホーチミン工業大学重化学工業人材育成	学生交流、大学内視察、JICA 専門家からのブリーフィング
	職業訓練学校（エスハイ KAIZEN 吉田スクール）	校長からの事業説明 訓練風景視察
	日越人材協力センター（VJCC）	ビジネス人材育成取り組み説明 施設内視察
保健医療	バックマイ病院	JICA 専門家によるベトナム医療事情・プロジェクト概要説明、病院内視察
障害者支援	ブンタウ養護訓練学校	青年海外協力隊員（美術）の活動ヒアリング、施設内見学
環境保全	ハロン湾環境保全事業（草の根技術協力／国際科学技術協力）	マングローブ植林事業、バイオトイレ、廃棄物循環システム等の視察（ベトナム人スタッフによる説明）
農業	ベトナム国家農業大学における農学人材育成	学生交流、施設見学、シニアボランティア 2 名の活動視察、意見交換
町並み保全・観光振興	ドンラム村訪問	青年海外協力隊員 2 名の活動視察、文化体験

(3) 現地日本人駐在員との交流会

海外勤務の具体的イメージを持つために、日本人若手駐在員による講演会および懇親会を企画した。当初の予定はハノイのみであったが、ホーチミンにおいても、JICA 駐

在員および協力隊員との非公式夕食会にブンタウ投資促進センター職員やブンタウ大学の日本人職員に当日参加してもらい、現地駐在員との交流会が実現した。また青年海外協力隊やJICA南部連絡所員とも、プログラム前後の昼食や夕食の時間で交流や意見交換の機会があった。

（4）その他

語学力向上および国際学会の体験を目的として、ベトナム国家農業大学（旧ハノイ農業大学）で行われたアジア作物学会の1セッションを英語で傍聴した。また、名大・三重大連携事業の一環として、名古屋大学教員によるベトナム経済に関する特別講義を実施した。またベトナムの歴史・文化を学ぶ観点から、ホーチミン統一会堂、戦争証跡博物館等を視察した。

3－7　現地滞在期間中のプログラム運営

学生主体でプログラムを管理するべく、訪問先や借上げバス運転手との連絡は各担当学生に一任し、引率教員は担当学生の支援に徹するスタンスをとった。また、滞在期間中は、ほぼ毎日ふりかえりミーティングを開催し、滞在先またはバスの中で参加学生の学びや気づきを共有する機会を設けた。

3－8　帰国後の活動

帰国後は、学生主体により80ページにわたる報告書を作成するとともに学内での帰国報告会を行った。また、三重県の国際交流団体が主催する小中学生向けのイベントにおいて有志学生4名がブースを出展し、ベトナムのストリートチルドレンの現状を子供たちに伝える活動を自主的に行った。

3－9　フィールドスタディーの効果

帰国後のアンケートでは、10名中8名が期待以上、2名が期待通りとの回答が得られた。報告書やアンケート回答、帰国後の担当教員と参加学生の個別面談の結果からも、当初掲げた3点の目的についてはおおむね達成されたと思われる。

今回のFSで特に印象に残ったプログラム内容をアンケートで聴取したところ、視察型よりも交流型の訪問先や活動が多数を占めた（表5）。さらに現地での振り返りミーティング、報告書、帰国後のアンケートや個別面談での反応から、当初設定したFSの目的にとどまらない、学生の多様な意識の変化が数多く観察された。これらの多くは、いわゆる

表 5　影響を受けた/印象に残ったプログラム名

質　　問	回　　答
今回のプログラム中もっとも影響を受けた、または印象に残ったプログラム 3 つを選んでください（順不同）	①　ホーチミン市師範大学フィールドリサーチ（7 名） ②　エスハイ KAIZEN 吉田スクール（5 名） ③　ハロン湾環境保全事業（4 名） ④　ベトナム人学生宅でのホームステイ（3 名） ⑤　ドンラム村（協力隊員活動視察・交流）（3 名） ⑥　ビンチュウ能力訓練センター（こどもとの交流）（2 名） ⑦　現地日本人駐在員との交流会（2 名） ⑧　鉄道事業、ベトナム国家農業大、バックマイ病院、日本人駐在員講演会（各 1 名）

「グローバル人材」として備えるべき資質に通じる内容であった。

4．グローバル人材育成の観点からみた学生の意識変化

4－1　「グローバル人材」の要素

本項では、今回の FS における学生の意識の変化について、グローバル人材に求められる資質という観点から整理したうえで、若干の考察を試みたい。「グローバル人材」についてはすでに多くの提言や分析がなされており、その用語の定義は多種多様（徳永（2011））である。本稿では、そのうち参照される割合が高い日本政府の「グローバル人材育成戦略」（2012）で提示されたグローバル人材の三要素を用いる。三要素を下記の 1〜6 の項目に分けて、学生の意識変化の内容を報告書およびアンケートから抽出するとともに、キャリア形成や職業選択に与えた影響を考察する。

項目 1：語学力・コミュニケーション能力（三要素の I）
項目 2：主体性・積極性、チャレンジ精神（三要素の II-1 および II-2）
項目 3：協調性・柔軟性（三要素の II-3）
項目 4：責任感・使命感（三要素の II-4）
項目 5：異文化に対する理解（三要素の III-1）
項目 6：日本人としてのアイデンティティー（三要素の III-2）

4－2　FS 参加前の学生の意識

本 FS への参加にあたっての学生の応募動機やベトナムに対する印象は表 6 のとおりである。途上国や開発問題に明確な関心を有して応募した学生は 4 名のみであり、残り 6 名

は、異文化体験や新たな体験への期待が応募動機であった。また、ベトナムに対するイメージも、開発途上国で被援助国といったステレオタイプのイメージが窺える。

表 6　応募の動機とベトナムのイメージ

1. 応募動機
（1）途上国および開発問題への関心（4 名）
① 「地域研究ベトナム」という授業を受けてベトナムに興味を持った。日本が発展途上国への支援を行っていることを知り、興味深く感じた。
② スラム街の現状についてメディアを通じて知り、途上国の開発やボランティア活動に関心を抱いた。
③ 発展途上国の問題に取り組む NGO などの機関に就職希望。途上国の現状を見たい。
④ 青年海外協力隊の活動現場訪問に関心を持ったため。
（2）異文化体験・学生交流への関心（3 名）
① 大学で留学生と仲良くなり、海外に興味がわいた。自分の視野を広げたい。
② 高校時代の米国でのホームステイ経験以来、異なる文化に触れたり人々と交流する楽しさを覚えた。さまざまな国を訪れてみたい。
③ 高校の世界史で世界の国々に興味を持った。海外の生活や価値観に強い興味と関心あり。
（3）新たな経験への期待（3 名）
① 大学生のうちにできる経験をしたい、チャンスを生かしたい。
② 普通の留学では体験・見学できないことができる。多くの人との出会いがある。奨学金つきで費用が安価。
③ 昨年も参加したが、ハノイが日程に追加されたため新しい体験に期待。

2. ベトナムのイメージ・関心
① 日本と比べると後進国なイメージ。日本が現地でどのような技術支援をしているかに興味がある。
② 発展途上国でひったくりなど治安の問題、バイクなど交通量の多さ
③ 社会主義国、南北戦争、枯葉剤の被害、目覚ましい発展
④ 親日的で町に多くの人や乗り物があふれている。
⑤ 昔テレビで見たベトナムの美しい景観が忘れられない。大自然を感じたい。
⑥ コメの輸出量 1 位。ODA 実績上位だが援助が本当に必要なのか知りたい。

4－3　帰国後の学生の意識変化

本項では、帰国後のアンケートや報告書における学生の記述を元に、引率教員の観察もふまえて、帰国後の学生の意識の変化を前述のグローバル人材の要素に関する 6 つの項目に分けて抜粋し、考察してみたい。

(1) 項目 1：語学力・コミュニケーション能力

今回 3 つの大学との学生交流を行ったが、日本人学生は、一様にベトナム人学生の高い英語能力に驚き、自らの英語力とコミュニケーション能力を向上させる必要性を痛感した様子が窺えた（表 7 参照）。特に、ホーチミン市師範大学との交流では、ベトナム語を母語とする師範大の日本語学科の学生たちが、日本語を流暢にあやつりつつ、英語もしっかり使いこなすマルチリンガルぶりに、大いに触発されたようである。ちなみに「帰国後に取り組みたいこと」のアンケート回答でも、「英語力をつける」がトップを占めている（表 12 参照）。

表 7　語学力・コミュニケーション能力に関する意識変化（抜粋）

①　現地の学生の方々との交流では、英語力やモチベーションの高さ、コミュニケーション力、専門性など、日本の大学生との違いを感じ、驚いた。世界で活躍するにはベトナムの学生の方が優れているように感じた。自分も頑張らなければと感銘を受けた。
②　語彙力に対する劣等感を感じた。コミュニケーションがとれないと、つながりへのモチベーションの低下にもつながっていく。ボディランゲージでの表現は初期的なものでしかなく、よりお互いを理解するためにはツールが必要だと再認識させられた。

(2) 項目 2：主体性・積極性、チャレンジ精神

表 8 のとおり、ほぼすべての参加学生が、ベトナム人学生の積極性、ハングリー精神、向上心、意欲に圧倒され、自らの主体性のなさを自覚して、今後の主体的な学習や行動に向けた高いモチベーションが得られた様子が観察された。また、週末のホームステイでは、ステイ先のホーチミン師範大生と深く語り合うことで、ベトナム人学生がもつ勉強や夢、目的意識といった点に大きな影響を受けたことも窺える。

表 8　主体性・積極性、チャレンジ精神に関する意識変化（抜粋）

①　ベトナム人学生の方々の"学びたい"という姿勢に驚いた。その英語力、質問に対する積極性、質問内容（日本の大学ではどんな勉強をしているのか、日本で学びたいのがどうすればよいか等）に圧倒された。
②　日本では出会うことができないような、勉強意欲に溢れている学生が多く、彼らの目は熱意で本当にギラギラと輝いていて、今の自分では負けているな、と強く感じた。もっともっとたくさんのことを吸収できる毎日にしたい。
③　ベトナムで様々な人と話すのは本当に楽しかったが、彼らに負けたくない、という気持ちにもさせられた。全然学ぼうとしない日本人に対して、貪欲に学ぼうとし、家族のために働こうと目をぎらつかせている若い世代がたくさんいた。私も彼らのようにもっと貪欲に勉強したい、自分に対しての宿題として常に心においておこうと思う。
④　挨拶の声の大きさなどに驚いた。志の高さや目標に向かっての行動をみて自分たちは必死さが足りないと感じた。

(3) 項目 3：協調性・柔軟性

本項目に関連する日本人学生の意識変化はアンケート等においては明示的な形では現れなかった。今回はチームの輪を乱す参加者もおらず、10 名の学生の人間関係は非常に良好で、日本人学生間および日越学生の合同チーム作業中も特段のトラブルもなかったため、学生の意識には現れなかったものと思われる。

(4) 項目 4：責任感・使命感

本項目については、訪問先毎に担当者を割り振り事前準備を行ったことで、各担当学生が「自分自身のプロジェクトである」という責任感や使命感が生まれ、プラスの効果をもたらしたことが窺える。また、レンタカーの管理や訪問先との事前調整を担当した学生から、これらの業務を任されたことで自身の成長につながった、との感想があげられた（表 9－②）。

表 9　責任感・使命感に関する学生の意識変化（抜粋）

①　直接訪問先担当者の方とメールで連絡をとったプロセスが非常によかった。直接連絡を取り合うことで担当者の責任感も高まるし、メールの練習にもなる。
②　車の管理担当として、運転手の方に英語で連絡を取る担当になった。最初は言葉が通じずパニックになったが、毎日運転手の人と電話や直接やり取りするようになって、少しずつ英語での会話や携帯の扱いにも慣れることができ、何日か経つと車を降りるときに笑いかけてくれるようになりとても嬉しかった。英語での会話や携帯を持つ責任などとてもやりがいのある担当で、かなり自分の成長につながったと思う。このロジを担当できて本当に良かったと感じた。

(5) 項目 5：異文化理解

ホーチミン市師範大学生との合同フィールドリサーチにおいて、日本とベトナムの違いを調べるプロセスは、ベトナムの文化とともに、日本の文化についても認識を深める機会になったと思われる（表 10－①）。しかしながら、ベトナムは中国の影響を強く受けた旧漢字圏に属し、宗教、言語、民族的にも日本との類似性が強い国柄であることから、他の東南アジア諸国と比べて日本とベトナムの文化的な差異から得られる異文化理解へのインパクトは少なかったようである。

他方、大半の学生（10 名中 8 名）にとっては、開発途上国への渡航自体がはじめての経験であり、途上国特有のエネルギーと熱気に圧倒された、という学生が多かった（表 10－②）。また、特に単独行動であったホームステイの期間中に異文化への理解が促された様子が窺える（表 10－③～⑤）。

表 10　異文化理解に関連する学生の意識変化（抜粋）

①　フィールドリサーチを通して、ベトナムでは日本が浸透している部分があり、よく理解してくれていたが、私たち日本人はベトナムについての理解がとても浅く、国際理解の重要性に気が付いた。
②　ベトナムへ行って沢山の衝撃を受けた。バイクに轢かれそうになったり、屋台の多さや落ちているごみの量に驚いたり、見たことのないフルーツやよく分からない虫を食べたり、沢山の経験をした。百聞は一見に如かずで、直接自分で足を運ぶことの重要性を実感した。
③　ホームステイ先では身をもってベトナムの文化を体験させてもらえた。ベトナム人のおもてなしの心、やさしさに感動すると同時に、言葉が通じなくとも笑顔でたくさんのコミュニケーションをとれることが実感でき嬉しかった。
④　初めてのホームステイという体験だったので、それなりに緊張もしたが、家族に温かく迎えられ、日本との生活の違いや考え方の違いを感じることができた。
⑤　文化の違いを感じたのはホームステイの夕食時で、近所の人たちもあつまってかなり大人数での食事だったが、日本の都会ではあまり見られなくなった地域のつながりの強さを感じた。

（6）項目 6：日本人としてのアイデンティティー

多くの現地日本人駐在員および日本への関心が高いベトナム人と接し、また日本による援助事業を視察することで、学生は 13 日間の滞在期間中、自分が日本人であること、また日本とベトナムの関係を意識し続けていた様子が窺えた（表 11－①）。特に、印象に残った訪問先として 2 番目にあげられた職業訓練校（エスハイ KAIZEN 吉田スクール）の視察においては、ベトナム人の若い技能実習訓練生が必死で日本式マナーを学ぶ姿を目の当たりにし、グローバル社会におけるアジア諸国と日本との競争の現実を体感し、大いなる刺激と危機感を持った様子が窺えた（表 11－②）。また、現地日本人駐在員から、日本の良さや日本の強みを聞けたことも、日本人としてのアイデンティティー

表 11　日本人としてのアイデンティティーに関する意識変化（抜粋）

①　日本人は後ろから追いかけられている存在であることに気がついていない。自分が上の存在にいるという感覚を持っているがそれは誤りだ。同じ能力を持ち、安い賃金、多くの労働力。日本人を雇う理由はどこにもなくなってしまうだろう。日本人としてもっと危機感をもち、行動に移さなければならない。
②　エスハイ KAIZEN 吉田スクールを訪問して、自分たちももっと学習意欲をもって学び、社会に出て行かないとあっという間に外国の若者に負けてしまう、という危機感を覚えた。
③　現地日本人駐在員の方々がおっしゃっていたことは、（海外にでてはじめて）「日本のすごさがわかる」ということ。日本にいては日本のすごさはわからないが、ここベトナムに来れば日本に誇りを持つことができ、日本人でよかったと思うことができる。日本を担う若者が日本にいてはいけない、地域人として世界人として働けるようにならなければならない、と思わされた。
④　駐在員の方の講演を聞き、海外で働くことによって海外と日本を切り離すのではなく、日本の良さをしっかり身に着けた自分が海外で働くことによって、やっと本当の楽しさに出会えるのではないか、と思えた。

を考えるきっかけになったものと思われる（表 11－③,④）。

4－4　キャリア形成と進路への影響

今回の FS への参加全体を通して、学生のキャリア形成や進路選択にはどのような影響があったのだろうか。表 12 のアンケート結果から、派遣前は 5 名にとどまっていた長期留学への関心が 8 名に増えたことからも、自身の今後のキャリア形成を意識する上で大きなインパクトがあった様子が窺える。

表 12　キャリア形成と進路への影響

質　　問	回　　答
本事業による留学の後、より長期の留学をしたいと思うか （派遣前の意識→派遣後の意識）	非常に思う（2 名→6 名）、思う（3 名→2 名） あまり思わない（4 名→1 名）、どちらともいえない（1 名→1 名）
今後取り組みたいこと	①　英語力をつける（4 名） ②　知識の幅、教養をつける（新聞やニュースを読む）（3 名） ③　各種勉強会・体験機会に積極的に参加（3 名） ④　海外へいって視野を広げる（2 名） ⑤　ボランティア活動（1 名）
質問：今後の進路への影響について（自由記述）	
①　参加前は将来特にやりたいこともなく、ぼんやり過ごす毎日だったが、現地でたくさんの刺激を受け、自分を変えていかなければならないという意識が芽生え、視野が広がった。今まで興味のなかったことに対しても関心を持つことができ、将来の方向性が見えてきた。 ②　進路に海外を視野に入れるうえで、英語を今のうちにしっかり習得し、ベトナムで学んだことを活かして進路の選択肢を増やせるように努力していきたい。 ③　進路選択はまだ定かではないが、もっとたくさんのことを勉強したいと思った。ベトナムで働く日本人もたくさんいて、これからグローバル化が進む中で、自分の専門とは別にもっと世の中のことを基礎教養として学び、日本のためだけでなくもっと広い視野をもって自分の専門や得意な分野で役立てるような人間になりたい。 ④　就職活動中自分の目標が見えず悩んでいたが、ベトナム人学生のハングリー精神や自己成長の欲求の姿をみて、自分自身過去を振り返り、もっと主体的に生きる姿勢があってもよいと感じ、帰国後就職活動を再スタートさせた。 ⑤　自分は農業土木専攻だが、ベトナムのインフラ事情を目で見て、改めて「土木」の素晴らしさに気付いた。卒業後、海外出張や海外勤務など、何らかの形でベトナムのように発展途上の国で働きたいという思いが強くなった。 ⑥　FS 参加を通して一番実感したことは、海外で働くことは珍しいことではないということ。しかしベトナムで働かれている方たちのお話を聞かせていただき、ベトナムの会社に新卒で就職したり、ベトナムで会社を興したりしている方がいることを知り、今は企業に就職して海外に派遣されるという道もあると思った。 ⑦　ベトナムの学生たちのキャリアを作り上げる姿勢に大きな刺激を受けた。これまで以上に真剣に学業に取り組み、いろいろな活動に参加しようと感じた。	

5．考察

今回のベトナムにおける海外体験学習を通じて、学生はグローバル人材に求められる多くの要素、中でも語学力・コミュニケーション力、主体性・積極性、チャレンジ精神、日本人としてのアイデンティティー、といった項目において、大きな気づきを得て、今後のキャリア形成も含めて自らを変革していく必要性を自覚したことが窺える。また、責任感・使命感の項目についても、学生主体で FS の準備や運営を行うことで意識を高めることができることが窺えた。

今回の FS のプログラム内容の中で、学生の意識変化に特にインパクトを与えたと思われる要因を考えてみたい。

(1) 同世代のベトナム人学生との交流

20 か所以上の FS 期間中の訪問先の中で、同世代のベトナム人学生から受けたインパクトが日本人学生にとっては最も大きかった。

中でもホーチミン市師範大学の学生との交流は、公式日程以外にも夕食やホームステイの最中を含めて、多くの個人対個人の交流の時間があったため、5 日間という短期間で人生観や将来の夢、といった個人的なことまで日本語で話しあうことができ、語学力・コミュニケーション力向上へ意識向上に加えて、主体性・積極性・チャレンジ精神といった要素についても、インパクトがあったものと観察される。

英語力・コミュニケーション能力の向上という観点からは、英語圏の学生との交流が有効との認識が主流であるが、アジア圏での学生の英語力も近年大幅に向上しており、非英語圏での学生交流も有効であることが窺える。

(2) 若手日本人駐在員との交流

途上国のビジネスや国際協力の第一線で活躍する日本人から、生きた教材として直接現地で話を聞く機会が得られたことも、学生にとっては非常に貴重な経験となった。中でも特に学生が影響を受けたと思われるのが、世代の近い若手日本人駐在員との交流である。懇親会で懇談した駐在員の大半が 20 代であり、中には大学卒業直後にベトナムで就職したという方も数名含まれていた。同じ内容のメッセージであっても、年の離れた年配者の話として聞く場合と、同世代もしくは年代の近い世代から発せられる場合では、後者の方が明らかに学生へのインパクトは大きい。海外体験学習において、現地で働く若手日本人との接触は、グローバル人材としての自覚を促す上で有効であると思われる。

(3) 新興国ベトナムの経済・社会状況

今回の訪問先であるベトナムが、日本との経済的・文化的つながりも強く、新興国として目覚しい経済発展のさなかにあることも、グローバル人材としての意識醸成、特に日本人としてのアイデンティティーや主体性等を高める環境として、大きな要因になっていたと思われる。明確な将来目標をもちポジティブに勉学に励むベトナム人学生の姿勢は、日本の 1960 年代の状況にも例えられるベトナムの急速な経済発展のさなかであればこそといえる。また、日本との経済関係が緊密化し、多くの日本企業や日本人のビジネスチャンスの場が拡大していることが、若手日本人駐在員からポジティブなメッセージが得られる背景であろう。

海外体験学習先の選定においては、「異文化理解」という観点から、日本との異質性に着目することも有効であるが、「グローバル人材育成」という観点から見れば、ベトナムのように目覚ましい経済発展を遂げる新興国独特の活気の中で、グローバル化する世界を体感するという効果にも着目する意義があると考えられる。

6．まとめと今後に向けた課題

あくまで事後的な考察ではあるが、学生の海外体験学習においては、同世代の学生同士の交流や若手日本人駐在員との交流が学生の意識変化を促す上で有効であること、ベトナムのような日本との経済・文化面でのつながりが強くグローバル経済を体感できる国を選定することがグローバル人材としての意識変化を促進する効果が高まることについて、示唆が得られた。

今後グローバル人材育成の観点からより効果的な海外体験学習にしていくためには、さらなる改善と工夫が必要である。今回の FS では、あくまで学生がグローバル人材に成長する上での「気づき」を得たに過ぎず、各自がモチベーションを維持しながら、継続的な自己啓発と能力開発に努めることが肝要である。また、グローバル人材として求められる要素を参加前から学生が自覚し、プログラム期間中に伸ばそうとする仕組みを FS のプログラムに組み入れていくことも重要である。海外体験学習にコンピテンシー評価を用いている中央大学の取り組み（中矢・梅村 2013）なども参考にしながら、グローバル人材育成の観点から更なるプログラムの改善に努めていきたい。

また、国際協力関連の視察プログラムの内容面の考察は本稿では触れなかったが、今回の FS では多様な学生の関心に即して訪問先を多数選定した結果、国際協力の多様な側面を学ぶ機会となった反面、一つ一つの訪問先の掘り下げが不十分であったことも否めない。本 FS のように異なる学部から学生が参加する場合、互いの専門分野の違いを活かしあう

ような分野横断的なテーマや訪問先を選定することが効果的である。名古屋大学のWell-being プログラムのフィリピンでの研修では、4 つの異なる研究科生がそれぞれ専門性を活かせるテーマとして、「災害マネジメント」を取り上げており（三牧他 2014）、先行事例として参考になる。

学生交流に関しては、高橋（2008）が指摘するとおり、日本人学生側への効果のみならず、ベトナム人学生側にとっても意義のある交流内容とするような工夫と配慮が必要である。今回の師範大学とのフィールドリサーチは、日本人学生主導の企画で進められ、師範大学生には通訳等の形でサポートしてもらう形で行ったが、ベトナム人学生側へのインパクトや意識変化という観点からも考察を加え、双方の学生にとって学習効果が高まるよう内容を工夫していきたい。

謝辞

本 FS の企画・実施に際しては、ホーチミン市師範大学を始めとするベトナム側関係各位、JICA や現地日本人駐在員関係各位から多大なるご協力をいただいた。この場を借りてお礼申し上げる。

引用文献

1. 吉井美知子（2011）「参加型開発教育の実践と考察～三重大学ベトナムスタディツアーの事例より～」『三重大学国際交流センター紀要』第 6 号、pp 65-79.
2. 徳永保（2011）「大学におけるグローバル人材育成に関する調査研究報告書」、平成 23 年度国立教育政策研究所プロジェクト研究.
3. グローバル人材育成推進会議（2012）「グローバル人材育成戦略（グローバル人材育成推進会議 審議まとめ）」.
4. 中矢礼美・梅村尚子（2013）「海外体験学習における学びの質的変化を促すコンピテンシー評価の有効性」『広島大学国際センター紀要』第 3 号、pp 15-28.
5. 三牧純子・桑垣隆一・荻巣崇世・新海尚子（2014）「海外実地研修を通じたグローバルリーダー育成の試み－Well-being プログラムの試行プログラムからの一考察－」『名古屋大学国際教育交流センター紀要』創刊号、pp 57-66.
6. 高橋優子（2008）「スタディツアーの教育的意義と課題－JICA カンボジア事務所での経験に基づいて－」『筑波学院大学紀要』第 3 集、pp 149-158.